

刊行に寄せて

折乃笠公德さんは「とっても素敵な人」です。「面白い人」「好奇心旺盛で、前向きな人」です。

人のことを褒めるとき、「いい人」「真面目な人」「よくできる人」「信頼できる人」などの言葉も思い浮かびますが、こういう言葉は彼には当てはまりません。

ちよい悪オヤジ、何にでも頭を突っ込み、毎日を楽しむ「人生の達人」です。

この本の書名は「全力で突っ走れ！」となっています。

しかし、折乃笠さんが全力で走っているように見えません。7割操業、折乃笠さんの大型トラックは3割の余力を残してアクセルを踏んでいます。

もちろん仕事は十二分の成果を発揮しています。部下の指導・育成、同僚とのコミュニケーション、社外のおつき合い、さらに自身の趣味を、余力をもちながら悠々とエンジョイしている人生の達人です。

そのことはこの本を読んでもらったらおのずとご理解いただけるでしょう。

皆さんはきっと「折乃笠さんは幸せな人生をやっているなあ。私もぜひ見習おう」という気になられることでしょう。

この本の中には日野から下諏訪までの甲州街道約180キロを、独りで時速5キロ、江戸時代の旅人のように歩き抜いた話が出てきます。

夜明け前から夕方まで、田舎の道路をひたすら歩きます。時には大型トラックを避けながら、時には美しい景色を眺めながら、時には地元の方々と触れ合いながら、時には名所旧跡を訪ねながら。

そして最後に目的地にゴールした時のご褒美の缶ビール。これのうまさは飲んでいない私にも響きます。

折乃笠さんの徒歩行は大変だけど楽しそうです。何と素敵な旅でしょう。

それにしても夜明け前に折乃笠さんを駅まで送り、戻ってきたら疲れた体を駅まで迎えに行く奥様の献身ぶりには頭が下がります。幸せな旦那さんです。

お母さんが旅先で倒れ、一カ月の闘病生活のあと亡くなられた話、飼っていた犬や猫が死んでしまう話が出てきます。

死というきわめて深刻な出来事を淡々と冷静に述べている折乃笠さんは、ひょっとしたら卓越した宗教家かもしれませぬ。

この本を通じて、私は折乃笠さんに人生の生き方を教えてもらっていると思います。

どうせ一度しかない人生だから、明るく楽しく元気よくやろうと教わっている気がします。

処女作に続いて第2作には人生を共に歩む奥様や子供さんをもっと登場させてほしいと思います。家族の協力なくしては折乃笠さんの幸せな人生はないと思うからです。

さらに折乃笠さんの人格形成に大きな影響を与えたと思われる幼少期を過ごした葛飾立石。東京の下町、ディープな立石もとりあげてほしいと思います。

第2作を期待して

折乃笠さんの親友 近藤詔治

(大型商用車メーカー元会長、元社長《折乃笠が部長の時の社長》)